IV－34　本州・北海道架橋に関する意識調査について

函館開発建設部　正員　大橋　猛

１．はじめに

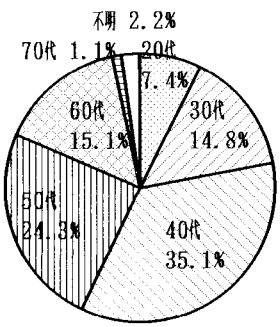
平成５年８月建設省の「海峡横断道路プロジェクト技術調査委員会」（吉田巖委員長）がとりまとめた報告書[1]によれば、我が国の海峡横断道路プロジェクト構想の１つとして津軽海峡が上げられている。また第１１次道路整備五箇年計画[2]においても、新交通軸の形成の項で青函地域を長期的な視点から調査を進めるとしている。

津軽海峡架橋構想については、「ジブラルタル海峡と津軽海峡と」（吉田巖　道路　1990年11月）をはじめいくつかの論文、講演等[1)~8)]で取り上げられ、さらにそれらがマスコミに報道されることにより道路技術者を中心として次第に認識は高まりつつあるものの、一般の方々にまではほとんど浸透していない状況にある。そのような中で平成５年９月２２日函館で、「津軽海峡に夢かける」という講演会が開催され、多数の一般の方の参加をみた。その際参加者を対象に行ったアンケート調査について、主催者の了解を得て分析した結果を以下に述べる。

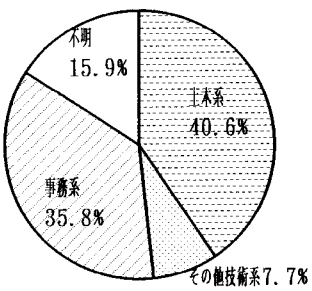
２．サンプル構成

講演会に参加した総数は約６００名である。その内２７１名からアンケートが集まった。そのサンプル構成を図－１～３に示す。その特徴は次のとおりである。

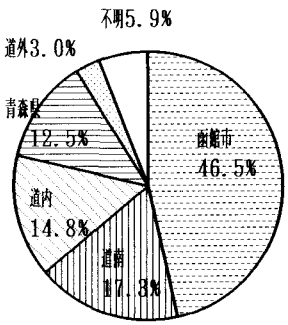
１）年代が幅広く分布していた。（アンケートにはないが青森県の中学生も参加）
２）土木を中心とした技術系が半分で、事務系も多数参加していた。
３）青森県を中心として道外からのアンケートが４２名（１５．５％）に及んだ。
４）女性が１３名含まれていた。
５）意見、感想を寄せた人が７３名であった。
６）津軽海峡架橋プロジェクトを今回の講演会で初めて知った人が７６名（２８％）であった。



図－１　年代別



図－２　仕事別



図－３　居住地

A Response Survey of Honshu-Hokkaido Bridge Project
by Takeshi OH-HASHI

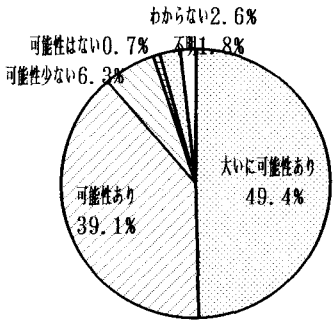
3．アンケート全体分析

アンケート総数２７１について分析した結果を図－４～６に示す。その特徴は次のとおりである。

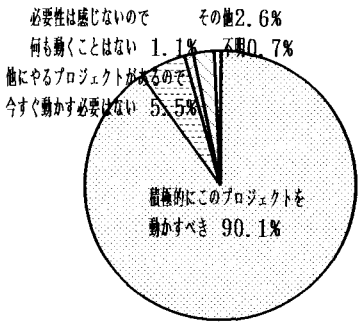
1）架橋の実現可能性について２４０名（８８．６％）が前向きに評価した。

2）２４４名（９０．１％）が積極的にこのプロジェクトを動かすべきとした。

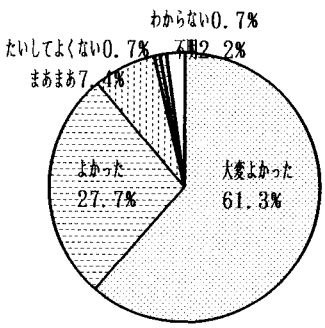
3）講演会自体を高く評価した人が２４１名（８８．９％）であった。



図－４　実現可能性



図－５　今後どうすべきか



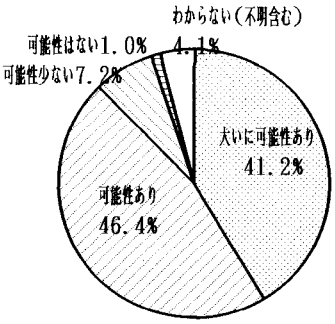
図－６　講演会の評価

4．事務系の分析

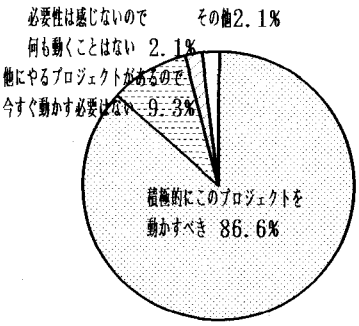
事務系のアンケート９７名（３５．８％）について分析した結果を図－７～８に示す。その特徴は次のとおりである。なお内３５名（３６．１％）が津軽海峡架橋プロジェクトを今回の講演会で初めて知った人である。

1）実現可能性についてはアンケート全体と同様に８５名（８７．６％）が前向きに評価した。

2）積極的にこのプロジェクトを動かすべきが８４名（８６．６％）と高い割合であった。



図－７　実現可能性
（事務系）



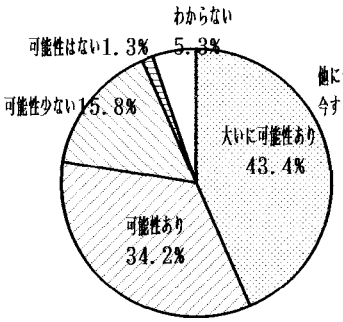
図－８　今後どうすべきか
（事務系）

5．初めて知った人の分析

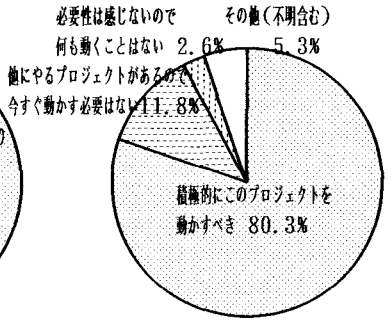
津軽海峡架橋プロジェクトを今回の講演会で初めて知った７６名について分析した結果を図－９～１０に示す。その特徴は次のとおりである。

1）実現可能性についての前向きの評価は若干下がるもののそれでも５９名（７７．６％）と高い割合であった。

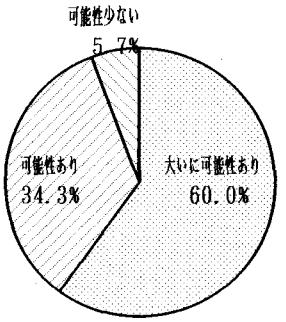
2）積極的にこのプロジェクトを動かすべきの割合も若干下がるもののそれでも６１名（８０．３％）と高い割合であった。



図－９　実現可能性
（初めての人）



図－１０　今後どうすべきか
（初めての人）



図－１１　マスコミ等で知った人の見解

６．マスコミ等で講演会を知った人の分析

講演会の案内については、主催者である函館青年会議所、函館地方法人会青年部会ならびに協力の道南建設二世会が中心となって、関係自治体、関係諸機関、土木系の学校などに情報を流したほか、広範囲へのポスター配布、新聞、テレビ等のマスコミ報道も行われた。その結果、ポスター、マスコミによって講演会のことを知った人からのアンケートが３５（１２．９％）あった。その分析結果を図－１１に示す。なお内１３名（３７．１％）が津軽海峡架橋プロジェクトを今回の講演会で初めて知った人である。

ここでも実現可能性を前向きに評価する人が３３名（９４．３％）に及んだ。さらに同数が積極的にこのプロジェクトを動かすべきと答えている。

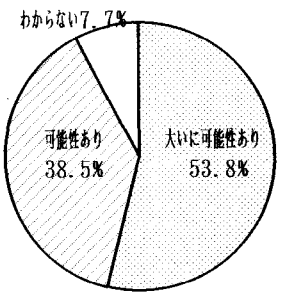
７．女性の分析

女性からのアンケート１３について分析した結果を述べる。

１）今回初めて知った人が５名（３８．５％）にも及ぶ。

２）実現可能性を前向きに評価する人が１２名（９２．３％）に及んだ。（図－１２）

３）さらに全員が積極的にこのプロジェクトを動かすべきと答えている。



図－１２　実現可能性
（女性）

８．意見、感想の紹介

アンケートの自由意見記入欄に７３名からコメントが寄せられた。その一部を紹介する。

- 経済大国である日本が世界一の橋を実現してほしい。未来ある大北海道にトンネル一本では情けない。頑張ってほしい。（戸井町　６０才　女性）
- 本州側とのタイアップが必要ではないでしょうか。本四架橋の延長上の技術でカバーできるものと、新しい発想、新しい技術開発が必要なものとの見極めの重要性を認識。（千葉市　４８才　男性）
- 東京一極集中排除には本州と陸路で結ぶアクセスが絶対に必要と思う。その意味からも実現させるべきだ。（函館市　４５才　男性）

・私ども小中学生の頃からの夢でした。実現してほしいものです。（青森県大間町　５４才　男性）
・「人生すべからく夢なくてはかないません」　私たちの住んでいる（北海道・道南）函館をどのような街にしていきたいのか。「津軽海峡に夢かける」を通してたくさんの人達と語り合うことが必要だと思います。（函館市　３８才　女性）
・次世代に残す仕事であり雄大なプロジェクトであると感じる。経済文化の交流の拡大によりこの北海道の良さを再認識する結果になるよう、環境問題を含め慎重かつ大胆に進めたい計画であろう。是非一歩前に進まんことを願っております。（札幌市　２７才　男性）

９．おわりに

現在、津軽海峡架橋プロジェクトについて、その技術的可能性、投資としての問題、国内外の同種プロジェクトとの関連およびその動向などのプロジェクトの将来の方向を判断するのに必要な情報がほとんど知られていないことはきわめて残念なことといわざるを得ない。例えば総人口わずか５１７万人、ＧＮＰが日本の３．８％にすぎないデンマーク[9]で、全長１８ｋｍのストレ海峡連絡路（海底トンネル＋橋、鉄道道路併用、1987年着工、1996年開通予定、事業費２８億ドル）が国費によらないで施工中である[8]などは重大な関心を寄せるべきものと思う。

本報文は、津軽海峡架橋プロジェクトについて、最高の有識者による講演を聞いた人、すなわち前段で述べた必要な情報を得た人がどのように判断するかを調査した最初のものである。結果は既述したとおり、分野を超えて大多数の人が前向きの評価を与えている。さらに多くの人が的確な情報に触れていただくことを期待するものである。そして同時に情報提供の機会を積極的に求めていく必要性を感じた次第である。

参考文献

１）海峡横断道路プロジェクト技術調査委員会報告書、平成５年８月
２）第１１次道路整備五箇年計画、平成５年７月、建設省道路局・建設省都市局
３）吉田巖：ジブラルタル海峡と津軽海峡と、道路、1990年11号
４）大橋猛：青函連絡橋の夢検証、土木学会北海道支部論文報告集　平成２年度
５）吉田巖：海峡横断道路、土木学会誌、1992年１月号
６）小長井宣生：北海道～本州間の交流ネットワークの現状と課題、開発土木研究所月報、1992年12月
７）地域振興講演会「津軽海峡に夢かける」報告書、道南建設二世会、平成５年１１月
８）駒田敬一：海峡横断プロジェクトと地域の活性化、北日本交流軸構想講演会資料、平成５年11月
９）世界国勢図会1994～1995、国勢社